

## 要 約

報告番号	① 乙 第	号	氏 名	加藤 寿寿華
主 論 文 題 名				
Effects of a school-based stroke education program on stroke-related knowledge and behavior modification—school class based intervention study for elementary school students and parental guardians in a Japanese rural area (学校における脳卒中教育プログラムが脳卒中の知識や行動変容に与える影響—小学生とその保護者を対象とした啓発介入研究)				
( 内 容 の 要 旨 )				
<p>脳卒中は、依然、わが国における死亡や要介護の主な原因の一つである。脳卒中による死亡者や要介護者を減少させるには、一次予防とともに、一般市民が脳卒中の初発症状を理解し、早期受診を促すことが重要である。そこで、脳卒中死亡率が高い地域である栃木県において小学生とその保護者を対象とした脳卒中啓発授業を実施し、脳卒中に関する知識の獲得と持続、ならびに脳卒中予防に関する保護者の行動変容が促されるかを検証した。参加者は、栃木県下8市町11校の公立小学校の6年生（11-12歳）279名とその保護者である。児童を対象に、2015年10～12月に研究者や専門家が啓発用のアニメやマンガを用いた45分間の脳卒中啓発授業を実施した。その終了時に参加児童は、啓発用のマンガを使って保護者に脳卒中に関する知識を伝えるよう指示された。脳卒中の知識の評価は、脳卒中の症状（3項目）、危険因子（4項目）、適切な対処方法についてであり、保護者には危険因子に関する行動の変容についても質問した。参加した学童及び保護者は、授業前、授業後、授業3か月後に自記式質問票に回答し、正答率や知識の変化率を比較した。解析にはマクネマー検定・二項検定を用いた（<math>P</math>値<math>\leq 0.05</math>：ボンフェローニ補正）。質問票を提出した生徒268名と保護者267名で解析を行った（回収率：96.1%）ところ、保護者の年齢（中央値）は41歳（IQR:38-44歳）で、82.8%が母親であった。学童では、授業前と比較して授業後は、正しい脳卒中の症状と危険因子、適切な対処方法とすべての項目で正解率が統計学的に有意に高かった。正しい脳卒中の症状に関しては授業後と比べて3か月後でも正解率の低下を示さなかった。保護者では、授業前と比べて授業後は、症状と危険因子の完答割合と対処方法の正解率が有意に上昇しており、3か月後でも脳卒中の症状と対処方法に関する知識も低下を示さなかった。また、危険因子に対する行動の変化について、授業前と比較して3か月後は、生活習慣改善や薬物療法でコントロールできると回答した割合が有意に高かった。</p> <p>以上、脳卒中の死亡率が高い地域における学校での脳卒中啓発授業により、参加した学童の脳卒中の知識が向上し、これらの知識は授業終了3か月後まで維持されていた。また、小学生からマンガを介して知識を得た保護者にも同様の効果があり、危険因子に関する行動の改善が認められた。</p>				